

## 12月23日（金） シンガポール共和国

### サンテック・シンガポール国際会議場

視察最終日のこの日はまず、MICE受け入れ体制の充実に取り組んでいる大阪市の都市魅力向上策の参考に資するため、シンガポールの主要なMICE施設であるサンテック・シンガポール国際会議場を訪問した。

1階エントランス前のテレビスクリーンは世界最大の大きさ（縦15m、横60m）で、ギネス世界記録に登録されており、スクリーンには来客に対する歓迎を記載することが多く、訪問時には大阪市会を歓迎する旨の表示をしていただいた。

ここでは施設の概要等について、オレンジ・タン氏から会議場内の施設を案内してもらいながら説明を聴取した。



（ギネス世界記録に登録されているスクリーン）

### 【現地視察及び説明概要】

#### （施設概要）

サンテック・シンガポールは1995年に開業し、2012年には1.8億シンガポールドルをかけ会議室や展示場などの大規模改修を行った。改修のコンセプトはデジタル化すること、新しい技術を取り入れること、お客様のニーズにあった会場を提供できるようにすること、会場の大きさなどを調整できることをコンセプトにした。また、運営は民間で行っており、政府からの補助等はない。

サンテック・シンガポールは市街地や空港から近い場所にあり、周辺にはホテルやショッピングセンターも数多くあるためMICEを開催しやすい立地である。

イベント等で使用できるMICE施設は総面積42,000㎡で、1番大きい会議室の最大収容人数は12,000人である。

1階と2階には300以上の小売店と100以上の飲食店を備えたショッピングモール（サンテック・シティ）が整備されている。

サンテックのフリーWiFiは、シンガポールで初めての高速WiFiであり、全館で利用可能である。最大6,000機器まで接続可能で、条件も一切ない。

Q：開業時はカジノができるとの想定で作った施設か？

A：開業した1995年はまだカジノができるか決まっておらず、カジノは考慮していない。

Q：改修したのはカジノができたからか？

A：開業した時点で、2012年から改修することが決まっていたので、カジノとは関係がない。

Q：マリーナベイ・サンズや他のMICE施設との違いやサンテックの強みは？

A：1つ目としては目的がビジネスイベントに特化しており、リゾート施設がないことである。そのため健康や薬品などのイベントが行われることが多い。

2つ目には6階建てと高層であり、1フロアの面積が他の施設よりも小さいので移動が非常に便利であることである。横よりも縦移動の方が楽である。

3つ目にはアクセスが良いことである。MR T 5路線のうち3路線が走っている。

4つ目には飲食店やホテルが周りに多いことである。ほとんどのホテルと地下でつながっており、ホテルとパートナー提携しているのでホテルを紹介することができる。

#### (6階コンベンションホール)

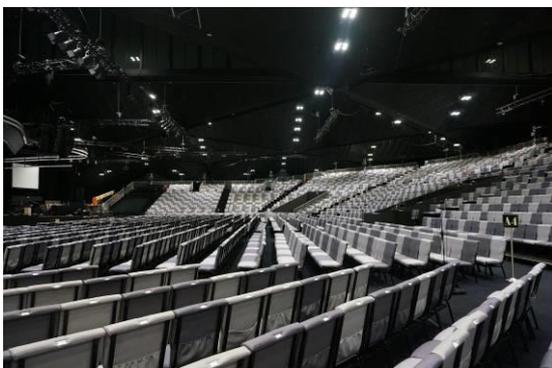
会場は3つあり、全体を1つの会場にすることもできる。総面積は1万2千㎡で防音壁はスライドで動かすことができ、収納することができる。天井高は11m以上あり、コンサート、カンファレンス、展示会などに利用されている。

Q：壁は何人くらいで動かすのか？

A：数人で動かすことができる。

Q：いす席は撤去できるのか。

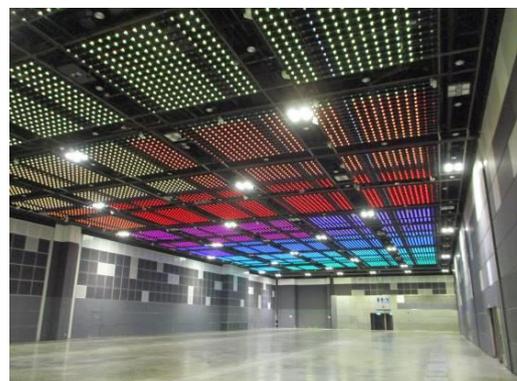
A：撤去することができる。



(6階コンベンションホール)

#### (4階展示ホール)

4つの会場があり、全体を1つの会場にすることもできる。総面積は1万2千㎡で壁はスライドで動かすことができる。天井高は8.5メートルあり、天井のLED照明は千種類の色があり、照明を使用してメッセージを出すことも可能である。床はカーペットを敷くことも可能である。



(千種類の色を使用することができる天井)

Q：VIPの動線は？

A：VIP専用のエレベーターがあり、そこから会場に入る。

Q：VIPの車はどこに停めるのか？

A：正面玄関にVIP専用駐車場があるほか、裏側にも駐車場があり、エレベーターもある。

Q：そのエレベーターは通常は使用していないのか？

A：通常は従業員用として使用している。

Q：利用目的で貸出を断ることはあるのか？

A：違法なイベントなどは断っている。主催する会社がきちんとした会社かどうかは調査する。

### (トラック搬入口)

各会場への搬入搬出は最大40フィート（約12メートル）のコンテナトラックでそれぞれの階から直接搬入搬出することができる。エレベーターを利用して荷物を個別に搬入するより直接トラックで搬入の方が時間がかからない。

Q：トラック搬入口などのバックヤードの割合は？

A：30～40%がバックヤードとなっている。

### (厨房)

厨房は3カ所あり、1日に1万人分の食事を作ることができる。イスラム食の厨房も1つある。調理には安全性の面、同じ味にすることができること、安いという理由から火を使わずにすべて電気で調理している。作る料理（例えば、切った具材か、そのままの具材か）に合わせて食材を注文している。

Q：切った具材では保存できないのでは？

A：料理に合わせて注文するので、余ることなく保存はない。

### (3階会議室)

会議室が36室あるが、室と室をつなげると18室となる。会議のほか小さなカンファレンス、ディナーなどでも利用される。3階は高級感を出すために床にカーペットを敷いている。会議案内板はすべてデジタルである。室温などはインテリジェントビル管理システムを採用しており、顧客の要望等に合わせて会議開始時の温度設定ができる。



(会議室のデジタル案内板)

Q：各室にスプリンクラーは設置されているのか？

A：設置されている。

Q：3階の会議室の稼働率は？

A：3階だけでは分からないが、サンテック全体では60%である。

## (サミットスイート)

首相や大統領が使う部屋で中には取材用のインタビュールームもある。シンガポールのコンベンションセンターで、VIPより上のVVIPルームがあるのはサンテックのみである。

## 【各会派の所感】

### 〔大阪維新の会〕

サンテック・シティーモール（ショッピングモール）に隣接するコンベンションセンターは、都心部にあり、周りにも多くのホテルが所在することで、非常に利便性が高く、MICE機能を形成している。

シンガポールにIR（カジノを含む）が出来る以前からの建物でありマリーナベイ・サンズやリゾートワールド・セントーサとは一線を画す。

コンベンションセンターとしては6階建ての長所を生かし、面異動でなく縦移動の為に、来客者の好評も得ている。インテックス大阪と比べると、圧倒的に移動が楽である。大ホールは大規模な音楽ライブからスポーツイベントにも使用できる。また、3分割まで出来るため来客数に合わせた、チョイスが可能である。各階の大小のホールは組み合わせ次第で研修会や食事を含む宴会にも対応できる。

国際会議やコンベンション、ショービジネスには非常に使い勝手が良いのではないかと思う。うめきたに、国際会議場とインテックスを合わせたようなもので、もし大阪でIRが誘致できないのであれば、こういう施設の誘致を目指すべきである。

### 〔自由民主党・市民クラブ〕

民間資本による巨大MICE施設であるサンテック・シンガポールは、都心の中心部に位置し、ビジネスイベントに特化されている。総面積は42,000㎡で、一室で12,000人を収容できるホールも用意されており、医薬関連のイベントが多いとのことであった。また、一日に10,000人対応できる厨房を用意し、食材も必要な物を調理しやすい状態で納品される体制が構築されている。ロケーションを活かした機能的施設であり、構造も合理的・機能的に整備され、特性が十分に活かされていると感じられる。

特にMICE施設のバックヤードが充実している。40フィートのトラックコンテナで各階に直接搬入が可能であることから、顧客からの要望に応じてMICE施設の各ホール内にコンサート会場や大型イベント仕様に衣替えが可能であるほか、収容人数に応じて、ホール等の壁を自由に動かすことが可能であるなど、あらゆるニーズに対応する機能性の高い会場仕様になっている。固定的な会議室やホールから成る大阪の既存施設と比較すると、当会議場のMICE施設としての優位性は非常に高いものといえる。

サンズやセントーサも含め、シンガポールには狭い国土の中に巨大なMICE

施設が3つも存在している。それら施設の稼働率と収益性の推移についても関心があるところである。

### [公明党]

シンガポールのMICE施設の一つであるサンテック国際会議展示場を視察、単体施設としてIRとは違う角度から「国際展示場」のあり方、老朽化、施設の更新が今後の課題である本市のインテックス大阪との比較も検討する。

この展示場の特徴はカジノやリゾート施設がないため、ビジネスイベントに特化し、健康や薬品のイベントが行なわれることが多いとの説明で、他のMICE施設との違いや強みを感じられ、シンガポールとしてそれぞれの存在価値を大切にしている様子が伺えた。周辺には高級ホテルがあり、シンガポール最大級のショッピングモールであるサンテック・シティーモールが隣接されていて、MICE環境としてはカジノが無いだけで充実している施設であろう。

シンガポールは観光都市としてもWiFi環境は充実しているが、サンテックのフリーWiFiは全館で利用可能で、実際使うと非常に高速で快適であった。

この施設は設備（音響・照明）が既に整っており使用者にとっては非常に便利な施設である。

またここには首相や大統領が使うサミットスイートがあり、VIPより上のVVIPルームがあるのも、空港や市街地から近い場所であることに加えて、ビジネスイベントに特化するエリアであることも関係するかもしれないと感じた。

1フロアの面積が比較的コンパクトで（といっても十分な面積はある）、6階建ての高層になっていることで、結果として歩く距離が短く、上下移動ですみ非常に楽で早いことが実感できた。これは本市のインテックス大阪が横移動が主（1～6号館）であるのと大きな違いがあった。先のサンズ社のコンベンションセンターは広すぎて移動が大変だったので、比較できてよく分かった。

各会場へはエレベーターを使わず、バックヤードでトラックを螺旋状に走らせて、それぞれの部屋の搬入出入り口に乗付けて直接搬入搬出できる仕組みになっていることが大変合理的で便利だと感じた。

大阪のMICE施設としてのインテックス大阪とグランキューブ大阪（大阪国際会議場）が一体化したものが、このサンテック国際会議展示場と言えるだろう。これが最新のトレンド、ベストモデルと言えるのではないだろうか。

この施設は1995年に開業し、17年後の2012年に1.8億シンガポールドル（日本円で約144億円）をかけて、デジタル化や新しい技術を取り入れて、お客様のニーズに合う、大きさを調整できる会場をコンセプトに大規模改修をしたとの説明を聞き、大阪国際会議場や特に古くなったインテックス大阪などに代わる新しいMICE施設を建設する必要性を痛感した。その建設については、費用面や経済効果、雇用などを考え、IR構想を取り入れることや、サンズ社やその他の事業者に託すべきではないかとの思いを強くした。

## リゾートワールド・セントーサ

今回の視察の最後の視察地として、世界的に名を知られている I R 施設であり、シンガポールに 2 つある I R 施設の 1 つである「リゾートワールド・セントーサ」を、「マリーナベイ・サンズ」と同様の目的を持って、また「マリーナベイ・サンズ」と比較する観点も含めて訪問した。到着すると会議室に案内され、経営企画部の宮島氏からリゾートワールド・セントーサの全体概要の説明を聴取し、その後、カジノ、M I C E 施設、シー・アクアリウムを現地視察した。現地視察後は、タン・ヒーテック CEO と意見交換を行った。

### 【説明聴取】

リゾートワールド・セントーサの開発企業であるゲンティン・シンガポール社は、I R の開発とオペレーションのそれぞれを行うスペシャリストとして 30 年間の実績があり、シンガポール初の I R を開発し、同事業のトップランナーである。

ゲンティン・シンガポール社は I R 以外にも医療関係や不動産など様々なビジネスを行っている。カジノのゲーミングの売り上げは全体の約 50% であり、その他の収入は他のビジネスからの売り上げである。

I R の運営経験は 30 年以上あり、初めは、1985 年のバハマ、南オーストラリアの開発であり、1993 年にはフィリピン、1995 年からはクルーズ船事業に進出した。2006 年からはアジアを出てイギリスのカジノクラブの運営に進出した。2010 年にはシンガポールにリゾートワールド・セントーサを開業した。

世界中に I R 運営会社はあるが、他と比べゲンティン・シンガポール社は財務基盤がしっかりしていることがビジネス上の特長である。

数社ある中で投資的企画グレードをもらっており、現金保有高が大きく財務基盤が安定しているため、短期的な財務事情に影響を受けにくいという特長がある。

セントーサ島内には、東南アジアでは初めての U S S (ユニバーサル・スタジオ・シンガポール)、世界最大級の水族館「シー・アクアリウム」、M I C E コンベンション施設、ホテルがあり、大きさは 49ha、6 億シンガポールドルのプロジェクトであり 1 つの建設プロジェクトとしては、歴史上最大規模である。ホテルは 4 つのブランドがあり、全部で 1,500 室、シンガポール本島のホテルを合わせると 2,000 室ある。また、M I C E では施設間の相乗効果を積極的に生かしたイベントを展開している。

セントーサの I R は、カジノがメインではなくディスティネーションリゾートであると考えている。ディスティネーションとはエンターテイメントやファミリー向けの施設を用意するなど、様々な方のニーズに応えてくつろぎを提供することである。

セントーサ島には、1 年間に 2,000 万人の入場者があり、シンガポールに来る人の 3 分の 1 が訪問し、80% が外国人で遠距離の来客が多い。

観光産業全体への貢献としては、シンガポールの I R は 2 つあるが、2010年にオープンし、前年と比べると外国人訪問者数は1,000万人前後から1,500万人へと57%の増で、観光収入は73%の増である。

雇用の創出としては、リゾート全体で11,000人の直接雇用があり、専門性の高いスタッフを取り揃えている。スタッフの内訳は7割以上がシンガポール人で3割が外国人である。経営を担うシニアマネジメントでは80%がシンガポール人で、シニアマネジメントの男女比率は半々である。

次世代の人材育成にも取り組んでおり、現地の大学院と共同で講座を行ったりもしている。

I R ではカジノにおいて責任のあるゲーミングに取り組む必要があり、依存症対策も積極的に行っている。外部機関からの評価 R G チェックというのがあり、アジア太平洋地区で初めて認定を受けた。

## 【現地視察】

### (カジノ)

カジノは最高級ホテル「クロックフォード・タワー」の地下にあり、15,000㎡のフロアにテーブルゲーム 560台、スロットマシン 1,600 台、その他最新のコンピュータゲームが設置されている。1日の平均来場者数は25,000人である。

マリーナベイ・サンズと同じように、入場時には厳しいチェックがあり、シンガポール国民と永住者は入場の際100シンガポールドル（約8,000円）支払う必要がある。

入口はCROCKFORDS CLUB、MAXIM CLUB、一般と3つに分かれている。

CROCKFORDS CLUBに入るには200万シンガポールドル以上の預託が必要であり、賭け金も基本は500シンガポールドルからとなっている。

MAXIM CLUBに入るには10万シンガポールドルの預託が必要である。

Q：VIPルームを使う会員の平均滞在日数は？

A：好きなだけ滞在することはできるが、平均は3日間である。

### (MICE施設)

MICE施設として6,500人を収容できる巨大なボールルームを視察した。ボールルームは、天井までの高さが11m、柱のない開放的な空間となっており、着席でも4,000人収容可能とのことである。



(カジノの入口)

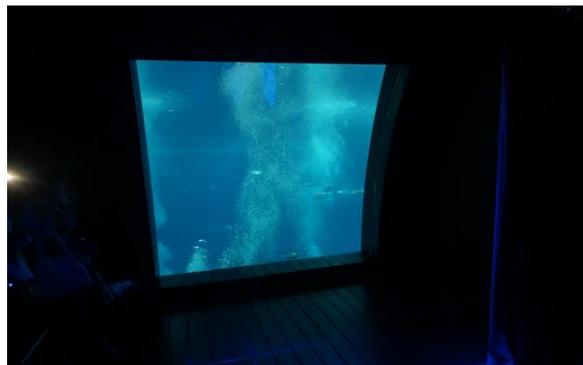
### (シー・アクアリウム)

世界最大級の海洋水族館であり、一番の目玉は幅36m、高さ8.3m、厚さ70cmの亚克力パネルを備え、南アジアからアラビア湾まで800種以上、10万匹の海洋生物を誇る世界最大のパノラマ水槽「オープン・オーシャン」である。

また併設しているオーシャン・スイートルームでは、床から天井までの亚克力パネルが水族館の巨大水槽に接しており、部屋にいながら水槽を泳ぐ魚が見られるユニークな構造となっている。



(世界最大級の亚克力パネル)



(オーシャン・スイートルーム)

### 【タン・ヒーテックCEOとの意見交換】

議員：大阪をどのように思っているか？

CEO：非常に可能性を秘めており、日本の玄関口であると思っている。

I Rの候補地である夢洲は何もないので、一から造ることができ、短期間で造ることができ開発がしやすい。セントーサ島はジャングルであったが、2007年から34カ月という短い時間で作った。

また、大阪は海外の人から知られている場所がたくさんあり、大阪だけではなく関西エリアの中心地、玄関口であると考えている。私自身も大阪だけでなく神戸や奈良を訪れた。東京は大阪に比べると他に行くところが少ない。大阪は1～2時間かけると色々な場所に行くことができるため大阪は有利だと思う。

外国から観光やビジネスで来てもらった場合、長く滞在してもらうことが大切であるが、そういう意味でも大阪はハブとなることができる。100 km圏内で京都、神戸に行くことができ、我々がI Rとして考えるディステイネーションという意味でも観光の拠点になることができると思う。

一つだけ問題であることは、インフラが整っていないということで、開発するためには、たくさんのリソースがかかってくると思う。

セントーサは開発して6年が経つので再開発を考えている。島をつなぐ橋のウォータフロント部分の飲食店になっているところを埋め立てて開発をしたい。建設時も7 haを埋め立てた。今回も2 ha埋め立てる計画である。無人の路面電車もインフラの1つとして整備したい。

インフラ整備は重要であり、10年～15年先を見て開発するべきで、それを作ることによってハブとなることができる。

議 員：大阪に投資を考えているか？

CEO：あるIR会社が1兆円使えると記事になっていたと思うが、バランスシート上、出せるのはサンズと我々だけだと思う。我々はキャッシュで50億米ドルある。

議 員：カジノの入場料を払っている人の割合は？

CEO：4割が地元の入場者で入場料を支払っている。良い点は入場料を払うため来ることが少ないことであるが、悪い点は入場料を払っているので制限時間である24時間最後までいることである。

議 員：夢洲を視察したことはあるのか？

CEO：4～5回は視察している。

議 員：インフラ整備は何が一番の問題点か？夢洲のインフラ整備として現在地下鉄を考えているが、何が大切であるか？

CEO：交通調査をしていないのでわからない。

セントーサでは橋と道路は我々が整備した。セントーサ島49haのうち7haの埋立ては我々がした。セントーサ島はクルーズ船が入るので、埋め立てるのは大阪より難しいと思う。

議 員：日本ではカジノを含むIRがなく、国民には不安もある。カジノを不安に思う国民性に対してどう対処していくのか？

CEO：県でも市でもできることはたくさんある。IRがどのような施設か伝えることができる。日本人はIRに対してよくないイメージを持っており、IR＝カジノというイメージがあると思う。IRという言葉はシンガポール政府が作った言葉である。シンガポールが作った後に、アメリカにもIRがあると言っているが、アメリカが言うとIR＝カジノになる。IRにはエンターテインメント性があることを説明するべきである。IRを進めるならば、国も自治体もセミナーを開いてIRが何かということの説明する必要がある。マカオもIRと言っているが、カジノとホテルしかないのでIRではない。シンガポールでもIRを作る時に議論して、国会も半分に割れたが、IRの目的が観光促進であること、ギャンブル依存症対策などセーフティネットをしっかりとすることで法案を通した。

議 員：依存症についてどのように考えているか？

CEO：シンガポール政府も同様に問題であると考えていた。あらゆる規則を入れ、社会的に弱い人を守る。排除命令を家族などがすることによって入場できなくする。IRを始めて6年経つがギャンブル依存症の数は減っている。カジノができて下がった訳ではないと思うが、シンガポールはカジノ以外でもギャンブル依存症が問題であった。カジノができた時に

ギャンブルを法律で規制することによって前からあった公営ギャンブルなども規制したので依存症率が減ったのではないかと考えている。

議員：現在のカジノに対する世論の割合は？

CEO：賛成、反対、中立それぞれ1/3ずつである。

## 【各会派の所感】

### 〔大阪維新の会〕

- ・ マリーナベイと比較して、ファミリー層をターゲットに絞った印象が強く感じられる。島全体がリゾートとしての機能があり、U S S（ユニバーサル・スタジオ・シンガポール）をはじめ、キッザニア・水族館とファミリー（子供）向けのアトラクションが目立つ。
- ・ カジノについても入場者はマリーナベイとは違うタイプの入場者が目立つ。（マナーも比較的悪い印象が見受けられた。）
- ・ 上記にも記しているが、ビジネスよりもレジャーで来ている雰囲気が拭えない。

### I Rの総括

- ・ I R視察で今後大阪に求められると思われる事項は
- ①既存の施設の老朽化が懸念される中で、M I C E 目的の施設の建設は喫緊の課題と思われるが、しかしカジノがクローズアップされ、I Rの本質が見えないように感じられる。I Rはシンガポールが発祥でカジノありきでは無い事を周知する必要がある。
  - ②シンガポール住民には入場料として100シンガポールドル（約8,000円）が必要であり、入場料は行政に入るシステムになっている。それを参考にし、入場料並びに法人税・建設用地の定借料（セントーサは60年の定借）などの収入があることと、1万人余りの雇用が生まれる事もアピールする。  
関空からのアクセスも確立し（高速道で約1時間、高速船で約30分）、周辺の観光施設（海遊館・U S J等）も相互協力し、マリーナベイとセントーサが一緒になった一大I Rとして運営できる地の利を活かすようにアピールする。
  - ③I Rの本当の目的は観光増進であり、運営を行うにあたっては、セーフガードを敷いた上で運営する。
  - ④大阪は関西の中心であり、1～2時間圏内に神戸・京都・奈良がある。東京には無い立地の良さがあり、観光のハブになる条件が満たされている。それを十分に活用し、観光都市大阪の新たな試みとしてI Rは必要不可欠である。

### 〔自由民主党・市民クラブ〕

視察地の最後として、リゾートワールド・セントーサを訪問した。本施設は、主にユニバーサル・スタジオ、水族館、M I C E コンベンション、カジノから構成されており、ファミリー層向けのくつろぎを提供するディスティネーションリゾートをコンセプトに展開されている。

セントーサを運営しているゲンティン・シンガポール社の担当者は、確たる財務基盤の上に会社運営されている点を強調されていた。ゲンティン社は現金資産保有高が高く、確固たる資産があることが特筆されることである。

セントーサリゾート全体で49ha、6億シンガポールドルの開発プロジェクトで、現在は11,000人の直接雇用があり、3割が外国人であることから、雇用創出効果は大きいと言える。

また、客層をサンズと比較すると、サンズは海外からのビジネスマン層や経営者層を中心とした客層が多いのに対し、セントーサは、ファミリー向けのエンターテイメント施設が多いことから、子供連れの家族層が多いといった違いがある。

これまでから、インフラ整備への投資に積極的に取り組んできたが、今後、海岸部分への新たな投資を計画中であるなど、段階的な投資から創出される経済的効果も期待されることである。

CEOに大阪の夢洲について聞いたところ、夢洲は100haのまとまった土地があることから様々なエンターテイメント施設を配置できる自由度の高い開発が可能であり、優位性が高いとしている。また大阪に対しては5,000億円以上の投資も可能であるとのことであった。

マリーナベイ・サンズとリゾートワールド・セントーサは、同時期に二か所の巨大なカジノ施設が狭い地域に誕生し、この間両社がどのような運営を進め、今後とも両社とも順調な運営が可能なのかという点に非常に関心がある。両社とも、開発にあたっては国としっかりと連携を図りつつ、観光、雇用などの経済効果創出を果たし、シンガポールの観光客を増加させる機能を担っている。こうした国との連携とその経済効果については、今後、大阪におけるIRを検討するにあたっては重要になるものと考えられる。なお、両企業とも既に大阪における分析を進めており、IR進出と投資について積極的である印象を受けた。

シンガポールにおいては、その国家の独立経過と地理的位置において、たぐいまれな都市国家として運営されており、自然資源が限られている中で、特にIRに関しては、国家として導入し観光や経済を活性化させる一方で、IR導入を契機として、国家として既存のギャンブル依存症とカジノ依存症を含めた一体的な対策を講じることで、国内全体としての依存症率を低減させる取り組みを行っている。

こうしたIR導入による経済効果の面と、そのための依存症対策とを一体的に検討を進めてきたことにより、現在の成果に繋がっているものと認められる。足元では徐々に依存症率減少傾向になっており、3年ごとに行われるギャンブル依存に関する調査の今後の結果にも注視する必要があるが、こうしたカジノの導入を契機とした国の様々なギャンブル依存症対策は、日本国内の依存症対策を検討する上で非常に参考になりうるものと考えられる。

日本では、公営ギャンブルが多岐にわたるが、その監督官庁も分かれているのが現状である。今後のIRの検討の際には、既存のパチンコ、スロット、競馬等

の分野と合わせて検討を行う必要があり、負の部分について、目を背けるのではなく、つぶさに議論していく必要性を感じる。

今回、シンガポールとマレーシアを訪問し、精力的に各施設を訪問し、東南アジアの国々が教育に積極的に取り組んでいる姿勢や、IRやMICE施設に関する関係者から意見を直接聴取することができたのは、貴重な財産となり、今後の施策に多大な効果を及ぼすものと考えられる。

### [公明党]

ゲンティン・シンガポール社が開発したセントーサのIRは、カジノがメインではなく売上げは全体の約50%で、ファミリーがくつろげる施設やエンターテイメントを提供するディステーションリゾートと位置づけているとの説明を受けた。シンガポールでは2つのIRが住み分けられていて、それぞれに成功していることから、日本の中での大阪ならではの観光戦略を官民共同で打ち立てて成功に導く必要性を実感した。

ゲンティン社のCEOも大阪でのIRの開業に意欲的であり、話を聞くと、周りに神戸、京都、奈良などの観光資源が豊富で、観光客に長く滞在してもらうための条件が揃っており、大阪が観光拠点のハブとなることのできる強みを実感できた。課題であるインフラ整備に於いても、セントーサでの7haの埋立てや橋と道路の整備の実績や開業6年経過後の今回の再開発で2～3haの更なる埋立て計画や無人の路面電車の整備計画がある話を聞いて、開発投資力の高い事業者として大阪でも十分な開発ができる手応えを得ることができた。

シンガポールでもIRの開業についての議論で世論、国会が半分に割れたが、その目的が観光促進であり、ギャンブル依存症対策などセーフティネットをしっかりとすることで法案が通り、結果、観光客は57%観光収入は73%増加し、逆にギャンブル依存症は3%から0.7%まで減少している話を聞き、日本におけるIRの開業は、これまで放置されてきた日本とりわけ大阪のパチンコ依存症を撲滅する絶好の機会にでき、急増する海外からの観光客をさらに増やすための取り組みとして大きな成果が期待できると実感した。

CEOとの話を通して、あらゆる規制で社会的に弱い人を守り、以前からあったギャンブル依存症を減らせた事実や、IR＝カジノではなくIRにはエンターテイメント性があることをしっかり説明して、まずは事実を認識してもらうことで、IRに対して日本の国民が持つ不安や悪いイメージを払拭していく必要があることを痛感した。それでも国論を二分することになるであろう。

今後、日本におけるIR推進はギャンブル依存症対策をどう講じていくかがポイントになる。

特にIRについてはカジノ収益が大半であり、カジノ無しでのIRは難しい。民間投資とはいえ、なぜ大阪に誘致しなければならないのか、それだけの収益が上がるカジノは日本人に影響が無いのかなど、議論を尽くしていかなければなら

ないことは間違いない。

我が会派としても今回の視察で得た成果を国会での議論、大阪市としての取り組みなどに活かし、2025年の大阪万博誘致とともに国際都市大阪の活性化に繋がるようにしていきたいと思う。



(タン・ヒーテックCEOと記念撮影)